

『醒睡笑』の副助詞サへ

——基本義〈周縁退縮性〉措定の試み——

田中 敏生

【論文概要】『醒睡笑』から副助詞サへの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁退縮性〉に求めるという観点から、諸用法の統一的理解を試みる。その際、サへの用いられる局面を、①仮定条件句、②否定述語、③類推表現の三つに大別し、それぞれの用例を逐一検討する。それによって、群数性と程度量性とを兼ね備えるという意味でのこの語の副助詞性が確認される。併せて、前代からの史の変容についての見通しが示される。

【キーワード】周縁退縮性 周縁波及性 周縁到達性 局時的語性 汎時的語性 語性内在了解

はじめに

本稿は、安楽庵策伝（一五五四～一六四二）の『醒睡笑』（元和九＝一六二三年成立／寛永五＝一六二八年、板倉重宗に献呈）から副助詞サへの用例を取り上げて、この語の基本的性質を〈周縁退縮性〉に求めるという観点から、諸用法の統一的理解を試みるものである。

よく知られているように、副助詞サへは、中古にあつては「〜までも」といった〈添加〉の意味を表わすものであったが（注①）、室町時代を経て近世初頭にはダニと交替し、それまでダニによって担われていたいくつかの用法を受け持つようになった。大づかみに言うならそれは、①仮定条件句にあつて最低十分条件を表わすものと、②否定述語とともにあつて皆無性の表現に与るものと、③主に肯定述語とともにあつて類推表現に参加するものとの、三つとすることができる。ダニに見られた四つの大きな用

法のうち（注②）、願望表現で用いられるものを除く総ての用法を引き継いでいるわけである。

ところで、これら三つの用法の間には、どのような「つながり」を見出すことができるだろうか（注③）。見かけの上ではたしかにそれぞれ別々の使われ方をしているようでもあるが、サへという助詞自身の身になって考えれば、この語は、たった一つのことをしているのかもしれない。そして、その事情を探り当てることができるならば、この助詞を知ることにとつて——敢えて言うなら「知ること」一般にとつても（注④）——、きわめて興味深い事柄となるのではないかと思われる。

そうしたことを考えるために、本稿では、サへの基本的性質として、〈周縁退縮性〉の意義を立てようとする。ある文中でサへが用いられるとき、この語の接する語句が、ある性質を密度濃く備えた中心的な部分から大きく引き退いた周縁的な位置にあつて、その性質をきわめて薄くしか備えな

い要素であることを、自身の意義において示すと考えるわけである。この性質を根柢に据えつつ、サへの諸用法を統一的に理解する道を、この文献での用例の限りに探ることが、本稿の課題である。

以下本稿では、右のような考え方のもとに、『醒睡笑』のサへ凡そ五十四例を、その用いられる局面から大きく次の三つに分けて見てゆくが、それは、群数性と程度量性とを両々あい兼備するという意味でのこの語の副助詞性(注⑤)を、この文献での限りに確かめる作業となるであろうし、同時にまた、前代からの史的变化についても、なにがしかの見通しを考えることになるであろう。

- | | |
|-------------------|-----|
| 一 仮定条件句で用いられるもの | 四例 |
| 二 否定述語とともに用いられるもの | 一八例 |
| 三 類推表現に用いられるもの | 三二例 |

〔計 五四例〕(注⑥)

一 仮定条件句

仮定条件句で用いられるサへは『醒睡笑』に四例見える。サへを有する仮定条件句がどのような意味を表わすかについては縷説を要すまい。現代語のサエの場合と基本的に等しく、「僅かにこれだけの要件が満たされるならば、それだけで十分に後件が成り立つ」といった筋合いを表わすからである。現代語サエの研究において、「最低条件」(文献③②、一八三頁)と呼ばれたり、「十分条件性の強調」(文献⑥、八頁)と呼ばれたりする用法に相当するものであるが、今これを、両者の知見に学んで、「最低十分条件」と呼ぶことも許されよう。満たすべき要件は極めて小さく最低の段階にあると言ってもよいのに、それだけでも十分に後件の成り立つことを表わすからである(注⑦)。

後件成立のための条件であること自体は句末の条件形によって表わされ

ているのだから、サへ自身のしていることは、満たすべき要件の内容を、最低段階のものへと位置づけることそのことにであると認められよう。条件内容を構成する一要素に附属し、その要素が、中心的と想定される大きな要因から大きく引き退いて、周縁的で密度の薄い要因に過ぎないことを示すことで、そうした意味合いをもたらすと考えられるわけである。ここに、『周縁退縮性』という意義の発揮される第一の局面があると言えよう。

句末の条件形に目を移すと、未然形によるものと、かつての已然形(「後の仮定形」)によるものが見られる。

まず、「未然形+バ」によるものは次の二例である。

- ① (三八)《まず我が子をさへつれてのけはすむとおもひ、三つ四つなる子をせなかにおひ、》(巻二・貴人之行跡・一)(角・上、八六)
- ② (一四一)《柿には核(さね)といふくせ物ありて、きにげをせんとする、それにかまい、とかくする間、費(ついへ)あり、其欲をさへきらせは、かならず物数をくふ徳あり。》(巻六・児の噂・四四)(角・下(四一)、二四)

①は、信長が京都に火を放ったときに、ある女性のとつた行動について述べている。我が子を無事に連れてゆくことができれば、それだけで十分だとの意であろう。「すむ」は「不都合なくうまく運ぶ」といったほどの意味であろう(日葡『Suni』の項に《決着がつく、あるいは、完了する》の解義が見える。邦訳・五八七頁)。そうなるために必要なのは、子供を無事に連れて行くという、ただそれだけのことで十分だ——そうした意味を表わすのにサへが用いられている。現金や大切な衣服・貴重品などを持ち出すことはできなくても構わないということであって、この点に、他の様々な要素を捨て去って最低ラインとも言うべき段階にまで条件内容を引き下げるといふ、サへのはたらき方を見て取ることができよう。当該要素を、密度の濃い中心点から大きく引き退いた周縁的な要素として示すことによって、そのような意味がもたらされるということであって、そのよう

な形で、「周縁退縮性」の意義が発揮されていると考えることができるであろう。

②も同様である。干し柿を早く食べることを語る児の言葉である。種にくっついていて分まで食べようとするから遅くなるので、たくさん食べるためには、その「欲」を捨てるということだけで十分だというのが、彼の意見である。ここでも、①と同様のサへのはたらき方が見られると言えよう。

他方、「已然形＋バ」によるものは次の二例である。

③(七八)《是は十疋の料足さへ》とれは、茶屋もいひ分あるましきかと
とはる。》(巻四・聞た批判・六)〔角・上、一七三〕

④(一〇〇)@《住吉と人はいへとも住にくし／錢さへ》あればどこも住
よし》(巻四・唯有・一八)〔角・上、二二〇〕

③は、食い逃げをされた茶屋の亭主が訴えた裁判で、裁判官(京都所司代)の板倉勝重が亭主に向かって言う言葉である。十疋(百文とされる)の代価が手に入れば、それでよいかと訪ねている。わざわざ訴訟沙汰にするための諸経費とか、(今日ふうに言えば)著しい精神的苦痛を被ったことへの補償とか、そういったものはないかといった意に受け止めることができる。そうした意味で、ここでのサへも、「十疋の料足」というものを、中心的で密度濃いありかたから大きく引き退いた位置を占めるものとして示す役割を果たしていると認めることができるであろう。

④は、僧・一休(一三九四～一四八二)が、住吉に棲んでいたときに詠んだとされる狂歌である。人は皆この地を「住みよし」と呼ぶけれども、決してそんなことはない、むしろ、どこであつても、お金があればそれだけで住みよい所になるのだ——そういった意味を詠み込んでいる。楽に暮らせるということが成り立つためには、お金があるという、ただそれだけのことで十分だというのが、サへによつてもたらされる意味であろう。ここでも《周縁退縮性》の意義によつてそうした意味あいが形成されている

と考えることができよう。一休の作とされるのだから、厳密には『醒睡笑』の時代の言葉ではないということになるが、当時としても十分理解に堪えたという意味で、当代語との同質的なあり方を認めておくことも許されようかと思われる。

こうして、仮定条件句ではたらくサへにあつては、後件成立のための要件を最低ラインとも言うべき段階へと引き下げることで、最低十分条件の構成に与るありさまが観察されよう。そのような形で《周縁退縮性》の意義が発揮されていると考えられるわけである。

二 否定述語

否定述語とともに用いられたサへは、『醒睡笑』に十八例見える(注⑧)。

一般に否定述語とともに用いられるとき、サへは、その接する語句が、想定される中心的で密度濃い要素から大きく引き退いたところに位置し、周縁的で密度薄い要素であることを示すのはたらく。それによつて、文全体としては、そのような小さな要素においても事柄が成り立たないことを言うことで「皆無性」を表わすものになる。ここに、《周縁退縮性》の意義の発揮される第二の局面があると言えよう。以下では、サへの接する語句がどのような意味で周縁的で密度薄い要素であるかという点に留意しつつ、観察を進める。

第一に、次のような例にあつては、数自体のあり方から、サへの接する語句の周縁的なありようを、はつきりと知ることができる。文献③⑤(九一頁)にいわゆる「弱数量叙述」としての使われ方である。

①(二三)《せんない異見や、われは一口さへあけまいとおもふた物。》
(巻一・鈍副子・一五)〔角・上、五六〕

②(一一)@《二服さへいらぬ茶人の生茄子／あへてその身のかほよこ
しかな》(巻一・落書・一)〔角・上、三三〕

①は、或る愚鈍な人が、出入り口の一つしかない家を建てたことをめぐる話である。防災の観点からも最低二つは作るべきだと知り合いの人が意見したのに対して、このように答えている。「一」が自然数で最も小さな数であることについて異論の余地はなからう。サへは、大きな数から著しく引き退いた位置にあるものとして「一」を示し、そのことによつて、饒多なありかたをおよそ稀薄にしか帯びない要素であることを表わす。〈周縁退縮性〉の意義がそのように發揮されると考えられよう。文全体としては、それと「まい」とが組み合わせることで、出入り口の皆無を望む気持ちが表わされることになるわけである。

②は、小さな「茄子」の茶入れ（中国製で極上品とされる）をたいへん大切に所蔵していた人に対する、からかいの歌である。「あへて」に「和えて」を懸け、「よごし」に「和え物」の意を添わせている。「二」を複数の中で最も小さな数と考えれば、①と同じはたらき方をしていっていると受け止めることができる。

第二に、次のような例では、ごく基本的な知識や素養を表わすという点から、サへの接する語句の周縁的なありようを明瞭に見て取ることができ

- ① (三六) 《直切(づんぎり)のずんの字さへしらいで、物かきたてはおやめあれと、けつくに》(巻二・名つけ親方・一一)〔角・上(一一〇)、八三二〕
- ② (六七) 《七日のぬかといふ字さへ見しりあらぬかと》(巻三・文之品々・五)〔角・上、一五〇〕
- ③ (六一) 《六日市のむいの字をさへえしらいでと》(巻三・不文字・一六)〔角・上、一三二六〕
- ④ (五八) 《金といふ合の字を、時々せしむるとよむすべをさへ、えしらいでと、けつく慢しことは》(巻三・文字知顔・一五)〔角・上、一二九〕

⑤ (六八) 《彼順礼はいろはをさへならはぬ者なりしか》(巻三・文之品々・九)〔角・上、一五二〕

⑥ (三五) 《いろはよりほかには、かなかきの文をさへよむことなし》(巻二・名つけ親方・六)〔角・上、八〇〕

⑦ (二七) 《爰(ここ)な少納言殿は、味噌をこすいかきをさへえしらいでと》(巻五・人はそだち・一四)〔角・上、二七八〕

⑧ (一七四) 《さては寂静はくまの、人にてはあるまじ、くま野にゐる者の、やがて隣の在所一らをさへ、しりたまはぬほとに》(巻七・謡・四)〔角・下、九二〕

⑨ (一七七) 《人倫たる身をうけながら、五文字七文字のわかちさへし

らぬはとなく》(巻七・謡・二六)〔角・下、一〇〇〕

⑩ (五八) 《脉としては浮中沈をも弁ぜず、七表八裏九道廿四の名をさへ

しらぬほどの医者あり》(巻三・文字知顔・一七)〔角・上、一二九〕

⑪ (八五) 《そちははや年二十になれど、つゐにおをうむすへさへしらいでとしかりけるを》(巻四・いやな批判・一)〔角・上、一八八〕

①は、「ずんぎり」(茶葉を入れる道具で、頭をまっすぐに断ち切つてある)の漢字表記が「直切」であることを知った無学な者が、剃髪したときに「どうずん」と名乗つて「道直」と書いていたという話である。他の人がみな不思議がつて尋ねるので、「こんな簡単な文字も知らないのか」と自慢しているのが、①に見える言葉である。本当は自慢するほうが無知だというのがこの話しのミソであるが、自慢話しの文脈に沿つて言えば、「直」という文字を、高度な学問をして初めて知りうるような難しい文字群から大きく引き退いた周縁的な位置を占めるものとして提示し、それによつて、その取るに足らぬありようを示すのが、ここでのサへであると言えよう。文全体としては、それがさらに否定と組み合わせることで、「知識の皆無性」を表わすことになる。〈周縁退縮性〉の意義がそのように發揮されることができらるであらう。

同じく文字にまつわる無知を話柄とした②③⑥も同様であろう。

②は、糠を無心した「かせ侍」(日葡《Caxesabura》の項に《貧乏で、知行の少ない武士》とされる。邦訳・一一三頁)が、「日、四五斗たまはり候へ」という手紙を書いて送ったが、先方ではさっぱり意味が分からなかったという話である。あとで会って訊ねたときに、侍が相手を見下して発した言葉が、②である。本来ひとつながりであるべき熟字訓を二つに割って平然としているところに、おかしみが籠もるのであろう。サへはと言えば、①と同様、「日」ぬか」という文字を、難解さとは縁もゆかりも無いありふれた知識として示すのにはたらいっている。《周縁退縮性》の意義において、それがなされるわけである。「六日市」の表記から「六」の訓みを「むい」と思い込んでいる③の例も同じであろう。

また④は、「金・合・令」の三文字の区別のつかない人の言葉とされる。

ここでもサへは、知っていて当然のごくありふれた知識(話者本人はそう思い込んでいる)を示すのに用いられている。⑤⑥の「いろは」や「なかき」の文が、高度な学問からかけ離れた低い要素であることは細かく説くに及ぶまい。サへもまた、そうしたあり方に基づきつつ、自身の意義を發揮しているわけである。

⑦以下にあっても、知識や技能をごく初歩的なものとして示すのにサへが用いられている。

⑦は、「い文字ぐさり」「い」で始まる言葉を次々に挙げてゆく遊び)をしているとき、ある児が「いかき」(ざる)を出したのを、後見役の僧侶(少納言)が上品な言葉に取りなして「扇垣」としたのに対して、却って反論している言葉である。取りなしの意図をくみ取り得なかった児の稚なさが笑いの眼目であるが、サへ自身は、「いかき」をごく初歩的な知識として示すのに用いられていると言えよう。また⑧は、熊野から使いの人(寂靜)が来たときに、連一検校という人が、笑いを取ろうとして発した言葉である。謡曲「二人静」に《一栄一楽、目のあたりなる憂き世とて》

(新大系・四〇二頁)とあるのを、パンクチュエイションをわざとずらしで、「一ら、熊野あたり」の意を附会したわけである(この種明かしで、みごと功を奏することになる)。ここでも「一ら」は、知っていて当たり前地名として持ち出されている。サへが、その接する語句の周縁的で取るに足りないあり方を示すことによって、それがなされるわけである。

和歌の基礎的な素養に関わる⑨や、医者としての基本知識にまつわる⑩(注⑨)、また、農家の女性にごく当たり前の素養として求められたであろう技能をめぐる⑪などについても、サへのはたらき方自体は、これまでのものと同列に見なし得よう。

第三に、次のような例にあっても、サへの接する語句は、それぞれに、周縁的で密度薄いあり方を帯びると言えよう。

①(一三八)《児のとまりにきて、夜はやう／＼ふけゆけど、菓子をさへ出すよしもなければ、枕を取あげ、口にあて／＼しけるを》(巻六・児の噂・二九)〔角・下(二六)、一八〕

②(二七〇)《比は霜月末つかた、身にきる物のうすくみじかければ、膚(はだへ)は風の棲(すみか)となり、糟糠汁(そうかうじる)さへ事たらねば、腹中(はら)のとはしさに壁のした道の傍に、ちつことた、ずみ、》(巻七・似合たのぞみ・一一)〔角・下、八四〕

③(九四)《目の上の瘤(うぶ)は誰もいやがる物にてあり、ぬしが額にある角をさへ、えのけなした物》(巻四・そでない合点・三三)〔角・上、二〇八〕

④(六三)《おほろ／＼に鐘ひ、くなり／老ぬれは耳さへもとの我な(わ)らて》(巻三・不文字・二八)〔角・上(二七・後半)、一四一〕

⑤(一五四)《佗人はうき世の中にいけらしとおもふことさへかなはさりけり》(巻六・推はちがふた・二四)〔角・下、五一〕

①の「菓子」は菓物のことであり、日葡《Quix》の項に《果実、特に食後の果物を言う》(邦訳・五二二頁)とされるように、本体としての食

事に対する添え物としての性格を多分に持っていた。食べ物としての本格度が低いことについては絮説を要せぬであろう。サへもまた、そのようなあり方を明示するのに用いられている。〈周縁退縮性〉の意義において、それがなされるわけである。最終的には、「なし」と共にあることによって、「ふるまわれる食べ物の皆無性」を表わすに至ると言えよう。

②の「糟糠汁」についても同様である。日葡『Sôo』の項に『Sôcojin. (糟糠汁) *Nucumiso* (糠味噌) と呼ばれる、米糠で作った味噌 (*Miso*) の一種で調理した汁 (*Xiru*)。』(邦訳・五六八頁。見られるように、「糟」「糠」とも開音表記になっている) とあるのを参照すれば、食べ物としての粗末なあり方は、おおよそ察しが付くであろうし、現にこの語は『ただ二時糟糠汁の風情なれば、ことに貧けいあるかな』(一八八頁…寺には八景の他に、信徒の御馳走に与るときの活計「安楽な楽しみ」と、寺の食事の貧計との、二ケイがあるという話) といったふうに使われるわけである。ここでもサへは、その取るに足らぬ要素であることを示しつつ否定と組み合わせることで、不如意極まりないありようを表わすのに参加していると言えよう。

③は、「神農」が、百草をなめて医薬を作ったという伝承から医療の神様のように言われているのに反対して、彼は下手医者だと主張する人の言葉である。神農の画像では額に角が描かれているのを踏まえて、「自分の額の角さえ取り除くことができないのに」と難じている。角は誰が見ても分かる単純な突起物であって、目に見えない内臓の疾患や原因不明の難病奇病に較べれば身体所見も簡易であり、治療に要する能力も高度なものからはほど遠い位置にある。サへもまた、そのような要素であることを示すことで、「治療能力の皆無性」を表わすのにはたらくと言えよう。

④の「耳」についても、同じように考えることができる。「耳が聞こえる」というのは、ごく当たり前の感覚能力であり、武術や芸能など諸種の専門的な技能に較べれば、それを維持するのに何ら特別な鍛錬も手立ても

必要ではない。この点に、周縁的なありようが備わると言えよう。サへもまた、そのあり方に根ざしつつ、「若々しさの皆無性」を表わすのに与ると考えられるわけである。

⑤は、『拾遺和歌集』(雑上・五〇五番)の歌である(作者は源景明)。このサへは、拾遺集の時代としては、〈周縁波及性〉の意義を有し、添加を表わすのに用いられていたと考えられる(注⑩)。これに対して、『醒睡笑』という作品に引かれたものとしては、サへは、「生きてゆくのをやめる」というきわめてネガティブな望みを、より積極的な欲求や願望から大きく引き退いたものとして示すのに用いられていると言えよう。この笑話集の編者にとっても読者にとっても、サへはもはや、周縁退縮的に小なるあり方を表わすものとして意識されていたと考えるのが自然ではないかと考えられるからである。文全体としては、そのような要素が否定と組み合わせることで、「願望成就の皆無性」が表わされることになるのだと言えよう。

以上の観察から、否定述語とともに用いられる場合にあっては、サへは、それぞれの用例において〈周縁退縮性〉の意義を発揮していると認めることができるであろう。

三 類推表現

類推表現に用いられたサへは三十二例見える。一般に類推表現で用いられるサへは、その接する語句が、或る性質を密度濃く備えて中心的と想定される部分から大きく引き退いた位置にあつて、その性質をごく薄くしか備えない要素であることを示す。表現全体としては、「密度薄い要素においてものの事柄の成立」が表わされ、類推の基盤となることがらが形成されるに至る。こうした点に、〈周縁退縮性〉という意義の発揮される第三の局面があると言えよう。

これらは、類推の基盤となる事柄（以下「基盤事態」）や、それに基づいて類推される事柄（以下「類推事態」）の示され方の面から、次のように細分することができる。

基盤事態 類推事態 昂進性

a…典型的類推構文	一例
b…準典型的類推構文	二一例
c…暗示的類推構文	一〇例

このうち a は、基盤事態と類推事態とがともに言葉に表わされ、かつ前者から後者への昂進性自体も「まして」「況や」といった言葉によって明示されるものであり、また b は、基盤事態と類推事態とが言語化される点では同じだが、昂進性を示す言葉は現れないものである。さらに c は、基盤事態だけが言い表わされ、類推事態は読み手の理解に俟って暗示されるに留まるものである。以下では、それぞれの小類について、サへの接する語句がどのような意味で周縁的な要素としてのありようを帯びているかに留意しつつ検討を進める。

第一に、a…「典型的類推構文」に用いられたものとしては、次の一例が挙げられる。

- ①（一二二）《葉さへすくれば毒となるいわれあり。まして酒の性は熱たり。そちのやうに大盃をもつて数をつくさは、いかでか脾胃のそんな事あらん。》（巻五・上戸・一四）〔角・上、二六六〕

①は、酒の害を説く人の言葉である。サへは、体を害する力を密度濃く備えた要素を中心的なものとして想定しつつ、「葉」が、そこから大きく退いた周縁的な要素であり、健康を損ねる力をさわめて薄くしか備えないことを示す。そのような要素であつても毒となりうることを言うことで、類推の基盤となる事柄が形作られるわけである。表現全体としては、まして「酒」の場合の害毒は云々といったふうに思考の流れが進んで行く。サへもまた、そうした類推表現の中で、《周縁退縮性》の意義を発動してい

ると言えよう。この例では、類推の基盤となる事柄と類推される事柄とがともに示され、かつ、両者における昂進的なありよう自体も「まして」によって明示されている。そうした意味で、典型的類推構文と呼ぶことができよう。

第二に、b…「準典型的類推構文」に用いられたサへは二十一例見える。

ここでははや昂進性を明示する言葉は見えないが、基盤事態と類推事態とは揃って言葉にされている。準典型的と称する所以である。小さく分ければ次のようになる。

イ…順行的なもの 一四例
ロ…溯行的なもの 七例

イの「順行的」というのは、表現の流れが「基盤事態→類推事態」の順で進むものであり、ロの「溯行的」というのは、それと逆の流れを辿るものである。

まず、イ…「順行的なもの」のうち、次のような例では、サへの接する語句自体のありようから、その周縁的な要素であることが明らかに見て取れる。

- ①（一九）《た、さへも道を二里三里とは、たやすく歩行なりさうもなき、ゆうにそだちのすかたなるが、此をもき物もちては、なにとしでありかれ候や》（巻一・ふはとのる・五）〔角・上、四六〕
- ②（五二）《唯さへかすむ目もとの、暮かたに二階よりりんとする。下にむすこの居けるを客人かとおもひ、ひたものいんさんに請じけり。》（巻二・賢たて・九）〔角・上、一一八〕
- ③（一六四）@《月の暮雪の朝のいかならん／た、見るさへに天の橋立》（巻七・思の色を外にいふ・一六）〔角・下（一五）、七二〕
- ④（一六四）@《酒の暮飯の朝のいかならん／茶で見るさへに天の橋立》（巻七・思の色を外にいふ・一六）〔角・下（一五）、七二〕
- ⑤（一五三）《一句の聴聞をのぞむ人さへまれなるに、ありかたきこ、

ろざしかな、》（巻六・推はちがふた・二二）〔角・下、四九〕

⑥（五一）《そち躰さへしりたるいせゑひを、我れがしらいでをらふか、》

（巻二・賢たて・四）〔角・上、一一七〕

①は、塩を売り歩く人の華奢な体つきを見て、おだてあげる僧侶の言葉である。「ただでさえ長い道を歩くのに難儀しそうな体つきで、こんな重い塩を持って歩けますか？」との意である。「ただ」は、なんらの付加物をも交えない「生」の状態を示す（注⑪）。いわばデフォルト状態表示の言葉であり、その意味で「小」なるあり方を帯びる。サへは、中心的で密度濃いあり方から大きく引き退いたものとして、そのあり方を明示するのにはたらくと言えよう。そこから、「まして重い荷物を担った状態では大変に違いない」といった類推義もまた引き出されてくるわけである（分類名「ふはとのる」は、「おだてに直ぐのる」の意とされる。角川・上、四三頁。「ふわと乗る」の意なのであろう）。

②の「たださへ」や、③の「ただ見るさへ」についても同様であろう。

②は、自分の息子であることが分からずに来客向けの応対をしてしまった事情を述べている。夕暮れ時でいつそう目が見えにくかったというわけである。また③は、天の橋立が、月光や白銀の輝きといった美観増進要因を帯びない状態を示すのに「ただ」が使われている。ここでも、①と同様のサへはたらき方が看取されよう。④の「茶で見るさへ」はその「もじり」であるが、「酒飯を伴わずにお茶だけを飲む」といった状態を示すものであり、サへの働き方自体は③と同じである。

⑤は、法談が終わってもまだ名残惜しいかのように居残っている人が居るのに感心した人の言葉である。「一句の聴聞を望む人さめつたに居ないのに」の意である。「一句」が、分量的に豊富なあり方から大きく引き退いた要素であることに疑いの余地はなからう。サへもまた、そうしたあり方を明示するのに、自身の意義を発動しているわけである。

⑥は、赤くて珍らしいものがあると思ってお小姓に持ってこさせたとき

に、「これは伊勢海老でございます」とわざわざ注進に及んだのに対する、武士の言葉である。「そち躰」は「お前如き者」といった口吻の備わる言葉である（注⑫）。重要な人物としてのありようを極めて密度薄くしか帯びない要素を示すのに、〈周縁退縮性〉の意義が供されていると言えよう。また、次のような例にあっても、文全体のありようを考え合わせるならば、やはりサへの接する語句の周縁的なありようが知られるであろう。

⑦（一〇七）@《日本さへをよびなき身に三こく／をま、にせよとの御意ぞめてたき》（巻五・妣心・二〇）〔角・上、二三四〕

⑧（一一一）@《程ちかき我昔さへ恋しきに／老はいかなる涙なるらむ》（巻五・妣心・四〇）〔角・上、二四二〕

⑨（一九五）《われは弓箭（ゆみや）を対して来（きたる）さへ、物すさまじき処也、なにとして、かゝる峭壁には住するや》（巻八・頓作・七二）〔角・下、一四二〕

⑩（一〇九）《ふたりがともにはしたなくてさへ、あやうかるべき渡世ぞかし、なんとしてそひはてまし》（巻五・妣心・三三）〔角・上、二三九〕

⑪（四三）《あるとき、をして鯽（ふな）をとり、汁にするさへおかしきに、子にむかひ、まづ汁をすふて見よといふに》（巻二・艵・一五）〔角・上、九八〕

⑫（七一）《私の親の日さへ難義するに、そなたの親の精進までは、のふいや、とそ申ける》（巻三・自墮落・一五）〔角・上、一五九〕

⑬（一九二）《是く／なたをさへ懐に入るれば、あかるふなるにすんだとて、とり出しわたせり》（巻八・頓作・五二）〔角・下、一三五〕

⑭（三二六）《われさへ、さやうに大なる名をはつかぬに、中々のことや、さりながら、本山にてつきたる名をよはぬも又いか、なる条、た、中夫になれとそなをしける》（巻二・名つけ親方・一〇）〔角・上（九）、八二〕

⑦は、「なたの庄」という処にすむ農民が、借した金を返してくれない人に対して《しやくせんを乞へともくれぬ氣のどくや／なま木に鉈の庄のものかな》と詠みかけたことをめぐる話である。仄間に及んだ細川幽斎から米三石を賜って、さらに謝意を詠じている。「日本—三国」といった対照から、その周縁的な要素であることは明らかであろう（注⑬）。なお注⑫も参照。

⑧は、三条西実枝（実隆孫。一五一一—一五七九）が十六歳のみぎり、禁中の歌会で「懷旧」という題で詠んだ歌である。この若さで懷旧は詠みにくい題であるが、文字通り「難題」を見事に切り抜けたという挿話である。自分のような若輩であつても昔のことは恋しいのだから、あなたがたのようにお歳を召された方々では、どれほど涙ぐまれることでしょう（お察し申し上げます）といった趣意を詠み込んでいる。当座の人達が詠みにくさに難渋するさまを密かに嗤っていたのに対する反撃の意をも込めての詠であつた。サへはと言えば、「わが昔」というものが、懷旧の念を強く掻き立てる中心的な要素から大きく引き退いたところに位置して、その性質をきわめて薄くしか持たないことを示すのはたらく。《周縁退縮性》の意義がそのように発揮されるわけである（分類名「妬心」については、注⑬）。

⑨以下についても同様である。⑨は、長尾為景（上杉謙信の父。？—一五三六）が、深山を訪れたときに巖窟で坐禪の僧を見つけたときの言葉である。自分のように弓矢を携えていても無気味な所で、どうして丸腰で平気ですらわれるのですか、との質問である。サへは、武器を携えているというのを、無気味さを感じる素因を極めて薄弱にししか帯びない要素として示すのはたらいっている。《周縁退縮性》の意義においてそうするわけである。

⑩は、貧しい農夫の妻が和歌に入れあげるのを見かねて窘める夫の言葉である。なりふり構わず共働きするというのを、生活苦からはほど遠い

はずの状態として示すのに、サへが用いられている。この点に、《周縁退縮性》の意義のはたらくさまが見られると言えよう（分類名「妬心」については注⑬）。

⑪は、親の生まれ変わりや信じて大切にしている鮒を汁の実にして吸わせるという話である。汁の実にすることとを、それを吸わせることに較べれば、まだしも可笑しさをもたらす素因を薄くしか帯びない要素として示すのに、サへが用いられている。《周縁退縮性》の意義が、そのようにはたらくわけである。

⑫は、精進が大の苦手の人が、知人から「粗飯をいかがですか」と誘われたときの返事である。親の精進だけでも辟易するのだから、ましてあなた様の分までどうして受けられましょう、との意である。サへは、親のために潔斎することとを、知人のためにもそうすることから見て、嫌厭の思いを惹き起こす素因を薄くしか持たない要素であることを示すのはたらいっていると言えよう。

⑬は、暗がりに紛れて鉈（なた）をくすねようと懷に入れた人が、明るくなって苦し紛れに鉈を懷から出すときのせりふである。あとから入ってきた人に、「これこの通り、この鉈でも懷に入るぐらいだから、十分明るいのだ」と言いながら懷から出している。ここでのサへは、「鉈」というものを、暗がりでも扱えるという性質を極めて薄くしか持たないものとして示すのに用いられている。そのようなものでも懷に入れるということが十分にできるのだから、明るさのほうも十分足りているというのが、ここでの類推の論理だと言えよう。

⑭は、弟子が修行を終えて「大夫」の呼び名をもらったことを師匠に告げたときの言葉である。師匠である自分でさえそのような大きな名前は付けないのだから、一段下げて「中夫（中風）」になれと命じた、という話である。「大きな呼び名を付ける」ということをめぐって、その不自然さをより少なくしか帯びない要素として「我」を提示している。この

点に〈周縁退縮性〉の意義の發揮されるありさまが見て取られるであろう。

以上、イ…〔順行的なもの〕では、類推の基盤事態から類推事態へといたった方向での文表現がなされていた。これに対して、ロ…〔溯行的なもの〕では、サへの用いられている当該句で文が終わる。しかし、これらも、その前に述べられたことがらとの関わり合いを考えるならば、やはり準典型的な類推構文を形作るものとして受け止めることができよう（注⑭）。

- ①（三四）《「さやうの大なる名はめづらし過て、愚僧まで人のほうへんせんずるは」とあれば、くたんの男、「いや、あまり大なる名とは存候はず、とう左衛門とつきたるさへ御座候は」》（卷二・名つけ親方・一）〔角・上、七八〕

- ②（四四）《「いや竹は大事もない、大木になり、ひき物につかふへき松茸をさへくふほどに。》（卷二・蛭・一八）〔角・上、一〇〇〕

- ③（一七八）《「いや、利分計にてすまされよ、尺迦の時代から本利ともになす事はない」「それはなにとしたる存分ぞや」「されはゆやに、仏ももとはすてし世のとつくり、もとなさねば、仏さへゆるされたれば、さて」》（卷七・謡・三六）〔角・下、一〇四〕

- ④（一七九）《「今ばかりではなし、むかしよりある事なり、人間の噂はをきぬ、仏の上にさへ似せものがあつたればこそ、当麻に、正身の弥陀如来、げに来迎と作りたるはと。》（卷七・謡・四四）〔角・下、一〇六〕

- ⑤（一八一）《「鍵のえの二間三間あるをゆでたるがめつらしからふ事は、それより大なる京鎌倉をさへ、ゆでもしりもしたは。うつけには葉がないとわらひし時、堀川夜討に、かまくらをゆで、廿日に都入とぞ聞えける。》（卷七・舞・七）〔角・下、一一〇〕

- ⑥（七二）《「俗いふ、きとくな事や、こちさへしらぬとあてたれば、いや、われはしらぬ、寺中のとりさたじやと。》（卷三・自堕落・二二）〔角・上、一六二〕

- ⑦（八六）《「それほどの事をはこらへよ、世の中はふしやうばかりぞ、われかまへでも福右衛門といふ名をはいはすして、ひようふつと、市太郎殿御親父とさへいふほどに。》（卷四・いやな批判・三）〔角・上、一九〇〕

①は、「日本左衛門」という名前を付けたいと言った人が、それは大仰に過ぎると窘められたのに対して答えた言葉である。「さほど大仰とも思えません。どう（唐）左衛門」と付けている人もいるくらいです」と弁じている。「とう左衛門」という名前が、「付けても当たり前」というあり方から大きく引き退いたところに位置するものであり、その性質をきわめて薄弱にしか帯びないことが、サへによって示されている。〈周縁退縮性〉の意義においてそれがなされるわけである。そこから引き出される類推義は、それに先行する「〔日本左衛門が〕あまり大なる名とは存候はず」という部分に既に述べられていると見ることも許されよう。そのように眺めるとき、類推表現としてのありようもまた十分に見て取られるわけである。

②は、「大きな竹に育つはずの筍を食べるのは、資源を無駄にするようで勿体ない」とある人が言ったのに対する反論の言葉である。梁の材（日葡《Egimono》の項に《家の梁・桁》とある。邦訳・二三九頁）に使えるはずの松茸でも食べるのだから、というのである。松茸というものを、「それを食べても資源の枯渇に大きな影響をもたらさない」というありかたを極めて薄くしか備えない要素として示している。そうしたあり方に〈周縁退縮性〉の意義の發揮されるありさまを見て取ることができよう。当該文は、連文機能的には、「竹は大事もない」に対する理由づけを行なうとも見られるが、そうであることの所以を尋ねれば、類推の構造に辿り着くであろう。

③は、負債の返済を迫られた人が、「元金は帳消しにして利子だけにして欲しい」と主張している言葉である。謡曲「熊野」に《仏も本は捨てし世の》

（新大系・五五八頁）とあるのに依りつつ、「本は」をわざと曲解しての言葉である。ここでもサへは、仏様を、元金を踏み倒すといった所業からきわめて遠い存在として示すの用いられている。《周縁退縮性》の意義においてそれがなされるわけである。

④は、ある人が「近頃は、刀や茶道具の偽物が出回って困る」とこぼしたのに対して、「偽物は昔からある」と応じた言葉である。謡曲「当麻」に《姫君も、扱は此願成就して、生身の弥陀如来、げに来迎の時節よと、感涙肝に命じつつ、帰礼の御袖も、しほるばかりに見え給ふ》（新大系・一九六頁）とあるのを踏まえつつ、「生身」を「正真」と、わざと取り違えて言っている。ここでもサへは、偽物が出回ることから極めて遠い位置にある要素として「弥陀如来」を示すのに用いられていると言えよう。

⑤は、「朱槍の柄が赤いのは（伊勢海老と同じで）茹でたからだ」との言い分を押し通そうとする人の言葉である。そんな大きなものが茹でられるものと窘められたのに対して、「京都や鎌倉のように大きなものだって、茹でたり煎ったりしている」と抗弁している。幸若舞「堀川夜討」の詞章に《鎌倉を出でて廿日には、都入りとぞ聞えける》（新大系・三五一頁）とあるのに依ったわけである。日葡《Ide》の項に《食物を煮る》（邦訳・三三一頁）とあるように、当時は「いで」の形が「茹で」の意でも用いられていたために、このような「もじり」が成り立ち得たのであろう。サへはと言えば、「茹でる」「炒る」といった操作を受けるに際しての「ふさわしさ」を極めて薄くしか帯びないものとして、「鎌倉」や「京都」を示すのに用いられている。《周縁退縮性》の意義がそのようにはたらくわけである。

⑥は、ある僧侶が「今は鮎の値段がとても安い」と言ったのに対する、在俗の者の冷やかしの言葉である。「不思議ですねえ。在家の自分でさえ知らないのに」というわけである。「魚の値段を知らない」というあり方

から極めて遠いところに位置する要素として「こち」を示すのにサへが用いられている。この点に、これまでと同様の働き方を見て取ることができよう。

⑦は、市太郎の弟である市次郎が、「市太郎の舎弟」と人に呼ばれるのが気に染まないむねこぼしたのに対して、父親が宥める言葉である。「そのくらのことは我慢しなさい。自分だって市太郎殿のご親父と、いつも呼ばれているのだから」というのである（「ふしやう」は日葡《Fujo》の項に《都合よく運ばず、その人の思うとおりに行かないこと》とある。邦訳・二八八頁。また「ひようふつ」とは、日葡《Fiofuto》の項に《いつも、普通に》とある。邦訳・二三五頁）。おそらくそれが当時の普通の呼び方だったのだろう。しかし、発言者当人の気持では、親は子供から敬われるべきものだから、名前を直接呼ばないということが、兄弟のような横の關係に較べて、よりふさわしくないと意識されていたのであろう。サへもまた、そのようなありようを表わすのに、自身の意義を供していると言えよう。

第三に、c〔暗示的類推構文〕に用いられたダニは十例見える。小さく分けると次の二つになる（注⑮）。

イ…基盤事態単独タイプ 五例

ロ…反戻事態提示タイプ 五例

まず、イ…「基盤事態単独タイプ」としては、次のような例を挙げることができるとが。

①（二五）《最初の三字の内をさへおとされたるやと腹立する時》（巻

一・鈍副子・二八）〔角・上（二七）、六一〕

②（二二）《三井寺にまつしき僧ありしか、寺内の兒に思ひをよせ、せんかたなくあこがるれとも、いひよらんえにしさへまれにて過けるに、かのちこのうけんの法師聞つけ、あはれみて》（巻一・鈍副子・六）〔角・上、五一〕

- ③ (一五〇)《此まゝにてしなれたらば、いかばかり嬉しかるべきが、若又もいきかへられたらば、其時の心うさ、いか、あらんやと、おもひやられてさへなくなりとぞ。》(巻六・推はちがふた・五)〔角・下、四二〕

- ④ (二九八)《人の果報無果報はせんかたなし、かりそめの寺の名さへ、我がすむかたをは、くちすさひにも、しやくせんめん〔積善院〕借錢院のもじり」とこそよべ、又そなたをばとりはつしても、れうそくるん〔両足院〕料足院のもじり」とよぶ、けなりや〔羨ましいことだ。〕》

(巻八・かすり・八)〔角・下、一四九〕

- ⑤ (九八)《あの住吉といふお人はなにとしたお人やら、本願寺さまさへ、おこしからおりて、おかませられたと。》(巻四・唯有・一〇)〔角・上、二二七〕

①は、伊勢物語の筆写を頼んだことをめぐる話である(日葡『Fucunū』の項に『Fucunū sunu. (腹立する) 怒る』という説明が見える。邦訳・二七一頁)。「最初の三字」というのは、写すべき本文全体から見れば、ほとんど最少と言ってもよいほど僅かな部分であり、分量面での十全なあり方から大きく引き退いた位置にある。サへもまた、そうしたあり方を示すのに〈周縁退縮性〉の意義を発揮していると考えられよう。類推義としては、「まして、あとの部分をたくさん写したら、どれだけの脱字が出てくるのか(思いやられる)」といったことが想定できるが、実際の表現では、それは言葉には出されず、暗に示されるに留まる。そうした意味で、「暗示的類推構文」が形成されていると言えるであろう。

②は、兄と接触する機会のない僧侶の話である。「えにし」は「縁・ゆかり」といった意味を表わすが、ここでは、そのきつかけとなる「つて」いったほどの意味であろうか。直接会ってコミュニケーションをとることに較べて、「つて」は、そこへ到るための手段に過ぎず、その意味で間接的であり、関係の密度はきわめて薄い。サへは、そのような方を示す

のにはたらいっている。〈周縁退縮性〉の意義において、それがなされると言えよう。

③は、厳しい姑が亡くなったときの話である。ある事柄を実際に体験することに較べて、単に思い浮かべることは、きわめて薄い存在感しか持たない。サへは、そのようなあり方を示すのに働く。「思い遣る」ということを、強固な存在感を持つ中心部から大きく引き退いたところに位置する要素として示すことによって、そうするわけである。

④は、積善院の人が両足院へ来て、人間の運・不運には如何ともしがたい定めのあるむね、語る言葉である(「果報」は、日葡『Quatō』の項に《幸運、あるいは幸福》の解義が見える。邦訳・五一六頁)。寺の名前というものは単なる呼び名であって、(そこに込められた思いは別としても)現実のありようと必然的な関わりを持つものではない。その意味で、運・不運といったことがらとは本来縁遠いはずのものである。サへは、そのようなあり方を示すのに用いられている。「寺の名」というものを、禍福栄枯浮沈といった、高度に運不運に左右される要素から大きく引き退いた位置にあるものとして提示することで、それがなされるわけである。類推義は、「寺の名前でさえそうなのだから」まして生身の人間の関わることはなおさらだ」といったふうになるが、実際の表現では暗示されるに留まっていると見ておいてよいかと思われる(それに先立つ「せんかたなし」の部分を類推義相当のものとして見て、溯行性の表現と捉えることもできなくはないが)。

⑤は、堺に下向した本願寺の管長が住吉大社の宿院を拝んでいるのを見た時の、老婆の言葉である。サへは、「本願寺様」を、「人を拝む」というあり方から極めて遠く離れた人として示すのに働いている。ここでも、〈周縁退縮性〉の意義によって、それがなされていると考えられよう。

次に、ロ…〔反戾事態提示タイプ〕としては、次の五例が挙げられる。

- ① (一〇六) @《大ばをは茶にさへ》きらふ物なるに／なへのえんとて宿

をかるらん》(巻五・姚心・一四)〔角・上、二二一〕

② (一〇六) @ 《大ばをは茶にさへきらふ物なれと／心くたけは別義あらしな》(巻五・姚心・一四)〔角・上、二二二〕

③ (二〇) @ 《あたをさへ恩にてむくふいはれあり／おんを忘るゝ人は人かは》(巻一・鈍副子・三三)〔角・上、五〇〕

④ (七三) @ 《天をさへかけりし梅の根につかば／土よりもなと花のひらけぬ》(巻三・清僧・三三)〔角・上、一六四〕

⑤ (九四) @ 《田舎のかせ侍、長陣の慰に誹諧をしてあそはんと言ひつゝ、一人はらんばうをしてさへ送る世に」とあれば、さらはつけ申さむとて、「われらは野兵糧たにもなし」》(巻四・そでない合点・三四)〔角・上、二〇八〕

①は、大場という武家を庶子が嗣いで、総領は筑紫で浪人をしていたが、秀吉の薩摩攻め(天正十五＝一五八七年)に従った庶子が、たまたま宿を借りると、そこが総領の家だった——そういった場面で総領の詠んだ歌である。歌意は「大きな葉はお茶にさえ嫌うものなのに(大場さんは、ちょっとお茶を出すだけの相手としても嫌われるものなのに)、どういふ縁があつて宿を借りようというのでしょう」といったものであろう。サへは、「お茶」というものを、拵える飲食物として(また「おもてなし」としても)、ごくごく軽い要素として示すのに働いている。そこから、まして大掛かりな饗応や宿泊には、なおさら嫌われるといった意味合いが汲み取られることになるが、ここではそれが現実のものになろうとする事が、不審の思いとともに表わされている。そうした意味で、背反する事態の提示がなされていると見る事ができよう。サへもまた、そうした表現の中で、自身の意義を発揮しているわけである(分類名「姚心」については注⑬)。

②は、①に対する返歌である。歌意は「大きな葉はお茶にさえ嫌うものではあるけれども、心を開いてうち解ければ別に問題はないだろう(よくもみほぐして飲めば、上等のお茶など要らないだろう)」といったもので

あろう(日葡《Betuni》の項には《Bechuni》への引照指示があり、そこらには《異なつた他の事》。また、上等の茶(Cha)の一種)との解義が見える。邦訳・五二頁)。ここでも、①と同様のサへのはたらき方が見て取られる。背反事態の提示は、①以上に明瞭であると言えよう。

③は、忘恩の不可なるむねを詠んだ歌である(「仇」は、日葡に《ATA》の項があり清音であることがわかる。《Arao tōzuru》(仇を報ずる)自分にしかけられた悪事に対して報復する》という説明も見える。邦訳・三五頁)。歌意は「害を受けたことでさえ、恩だと思つてお返しをするのにはそれなりの理由がある。それなのに、恩を受けたことを忘れるような人は、本当の人間と言えるだろうか(言えはしない)」といったふうになろうか。サへはと言えば、感恩報謝の気持を抱くにふさわしいものから大きく引き退いた位置を占める要素として、「仇」を示すのに用いられている。そこから、「まして恩を受けたなら、恩返しをするのは当たり前だ」といった類推義が引き出されてくるが、実際の表現では、それと背反する事柄を示しつつ、それを斥けているわけである。

④は、太宰府天満宮の梅が枯れたときに詠まれた歌である。サへは、当たり前と思える性質を色濃く備えた中心点から大きく引き退いたところに位置する要素として「天(を翔ること)」を示すのに用いられている。それを足場に引き出されるのは、「まして、花を開くことぐらい何でもないはずだ」といった事柄であろう。実際の表現では、それが反語の形で言い表わされているため、背反的事態が示されると見る事ができるであろう。

⑤は、田舎の下級武士が消閑のすさびに行なつた付け合である。「らんばう」は、日葡《Rando》の項に《略奪すること、あるいは、強奪すること》(邦訳・五二五頁)とあるのが、それに当たるであろうか。ひとつながりの漢語熟語を、わざわざ途中で分断してみせたところが、「おかしみ」の眼目なのであろう。前句は、あるいは極限的なあり方それ自体を表わす

用法と見なすべきなのかもしれないが（注⑬）、付け句が背反事態提示のように見えなくても、姑くここで扱っておくことにした（極限的なあり方を表わす場合でも、密度の薄さを伴ったのそれと考えれば、〈周縁退縮性〉の意義自体は、変わることなく認めることができようかと思われる）。

こうして、類推表現におけるサへにあっても、ほぼ総ての用例において〈周縁退縮性〉の意義のはたらくありさまが認められると言ってよいであろう。

むすび

以上、『醒睡笑』の副助詞サへについて、用法を大きく三つに分かつつ、その使われ方を見てきた。それによって、〈周縁退縮性〉というこの語の基本的意義が、それぞれの用例において發揮されているありさまが観察されたのではないかと思われる。骨子を再述すれば、①仮定条件句にあつては、周縁部へと引き退いた密度薄い要素によって条件内容を組み立てることで「最低十分条件」を構成するのに与り、②否定述語との組み合わせでは、周縁部へと引き退いた小さな要素を示しつつ否定作用を受けることで「皆無性」を表わすのに加わり、類推表現に際しては、周縁的な要素においてもの事柄の成立を言うことで、類推の基盤となる事柄を形作るのにはたらいっていたのであつた。この文献におけるサへは、以上のような意味合いにおいて、〈周縁退縮性〉の意義を有すると認めることができるであろう。

同時にそれは、これら三つの用法が互いに無縁のものではなく、統一的に理解されるということでもある。冒頭で述べた「たった一つのこと」を、〈周縁退縮性〉という点に求めているからである。現代語のサエについては、仮定条件句での用法と類推等の用法との「つながり」如何が問題とさ

れることがあるが（注⑭）、そうしたことをも含めて、本稿は、この語をめぐる語性内在的な了解の試みであつたとも言ひ得るであろう（注⑮）。サへに見られる多様なふるまいを、サへという助詞自身の身になって考えようとしたわけである。

この語の副助詞性ということも、こうした基本的意義と相即的に理解することができる。サへは、想定される或る中心点に対して周縁的な位置を占める要素を示すという意味で二事項の関係を踏まえるものであり、この点で群数性を有するが、その関係に「中心―周縁」といった意味での軽重差を伴うという限りに程度量性をも帯びるのであつて、そうしたあり方において、サへは、副助詞としての性質を明瞭に有すると認めることができるであろう。『あゆひ抄』において、添加にはたらく古典語のサへは「だに家」（文献⑯、二四三頁）に撰せられているが、変容を遂げたであろうこの期のサへにあつても、「だに家」の一員たる要件は（変容されたあり方においてながらも）なお十分に備えていると見ることが許されるであろう。

以上のようにして、サへの基本的性質を〈周縁退縮性〉に求めることができるとするならば、それ以前の時代からの展開の様相（以下「展相」と称する）は、どのように理解されるであろうか。

平安時代のサへは、〈周縁波及性〉の意義を有するものであつた。ある文中でこの語が用いられるとき、その接する語句が、本体的と目される事柄に対して周縁的な要素であることを示しつつ、本体に備わるあり方を波及的に共有する形で添い加わってゆくことを表わすのが、この語の基本的性質だつたのではないかと考えられる（文献⑯～㉔）。それが〈周縁退縮性〉へと変化するに際しては、基盤事態存在の稀薄化といった事情を想定することができよう（注⑰）。添加がなされるとき、その基盤となる事柄は確実に存在するものとして意識されているが、その存在性の影が薄れ、単に想定されたに過ぎないものとなるとき、〈周縁退縮性〉の意義が生ず

る。そこで中心的と目されているのは、凹レンズの虚焦点にも似て、仮構的な存在性格のものであり、それによって、当該要素の周縁的で密度薄いあり方が示されるようになると考えるわけである。

この場合、〈周縁波及性〉と〈周縁退縮性〉との二つの基本的意義は、各時期に固有のものとして措定されている。その意味でこれらを「局時的語性」と呼ぶことができよう（注⑳）。それならば、その変化をさらに根柢において支える基体として、「汎時的語性」とも呼ぶべきものが想定されてよい（注㉑）。それをここでは〈周縁到達性〉という点に求めてみたい。ある中心的な要素から周縁的な要素へと至り着くあり方を、何らかの意味で備えるものとして当該要素を示すといった意味である。この根柢的な性質が、基盤事象存在の明確さを伴って立ち現われるとき〈周縁波及性〉の意義を生じ、その稀薄化した状態の顕在化するとき〈周縁退縮性〉の意義へと転身する——およそそういった展相の姿を考えることができるのではないかと思われる。それは、この語の史的な変容についても、サヘという助詞自身の身になって考えるということにほかならない。語性内在的な了解が、展相の局面においてもなされるのだと言えよう。

ダニとの関連に目を遣るならば（注㉒）、この語がダニの諸用法を受け継ぐことができたのも、両者が固有の性質としてそれぞれに帯びる「小」なるあり方が、大局的に合致するものだったからだと考えられる。ダニの基本的意義は、〈相対的軽少性〉という点に求めることができるが（文献⑩～⑱）、そこに備わる「小」なるあり方と、〈周縁退縮性〉に備わるそれとが、いわば共通の軸となつて、ダニからサヘへの交替がなされたのではないかと予測されるわけである。

もとよりここでの局時的語性は、この文献に見られた限りに引き出されてきたものに過ぎないし、したがって右の展相観もまた、それを足場とする限りでの見通しであるに留まる。さらに、ダニからサヘへの交替についても、実例に徴しての具体的な肉付けがなされねばならない。本稿でなし

得なかつたこうした様々な課題を解きほぐして行くためにも、他の諸文献をめぐる更なる調査と討究とが待たれるであらう。

〔付記〕『醒睡笑』の本文は、次の文献を用いた。

・『嘶本大系 第二巻』（武藤禎夫・岡雅彦編 一九七六 東京堂）
本文の解釈については、次の注釈書をも参考した。

・角川文庫『醒睡笑 上・下』（鈴木棠三・校注 一九六四 角川書店）

用例の掲出に際しては、次のような行き方を取った。

- ・頭に嘶本大系の頁数を示した。
- ・末尾に角川文庫の頁数を示した。
- ・大系と文庫とで章番号の異なる場合は、文庫のほうにその章番号を（ ）に括って示した。

・歌（狂歌を含む）の用例には「@」を附した。

・歌が本文中に引かれているときは「一」で括って示した。

・上の句と下の句との改行は「／」で示した。

・「ハ」「ミ」は「は」「み」に改めた。

・読み仮名を適宜（ ）に括って示した。

・引用者による注解を「」に括って挿み入れたところがある。

・必要に応じて会話文に「」を附した（すべての会話文に施したわけではない）。その場合、〃〃部分の句点は省いた。

『醒睡笑』以外の作品等は次の書物に依った。

- ・『邦訳日葡辞書』（土井忠生ほか編訳 一九八〇 岩波書店）
- ・新日本古典文学大系『謡曲百番』（西野春雄校注 一九九八 岩波書店）
- ・新日本古典文学大系『舞の本』（麻原美子・北原保雄校注 一九九四 岩波書店）

これら諸書の引照に際しては、「大系」「角川」「邦訳」「新大系」等々の

略称を適宜用いた。また『日葡辞書』を引用する場合は、アルファベツト表記の部分のみを横書きとし、邦訳部分は縦書きにした。句読点も縦書き用のものに改めた。

なお文献²⁸では、『醒睡笑』のバカリとノミについて論じている。併せご参照頂ければ幸いである。

注

- (注①) 平安時代のサへについては、文献¹⁹～²⁶。
 (注②) 平安時代のタニの用法については、文献¹⁰～¹⁷。万葉集のそれについては、文献¹⁸。
 (注③) 現代語サエの議論では、文献⁸（三三頁）で、特に仮定条件句での用法と類推等の爾余の用法（所謂「主文の用法」）とについてそうした問題が取り上げられている。
 (注④) 『バイドロス』の《分割と総合》という言葉も想起されよう。そこでプラトンはこの語を「ディアレクティケー」に関わるものとしてソクラテスに語らせている（266・B～C。藤沢令夫訳・岩波書店版『プラトン全集5』二二二～二三頁）。
 (注⑤) 群数性と程度量性との骨子とする副助詞の類的性格把握については、文献²⁴。この観点を取ることは意味については、文献¹⁴の「むすび」参照。
 (注⑥) 文献⁸（四七頁）では、サへの用例総数は五十五例とされる。その内訳をこの文献の用語法に従って記すと、添加に働くものが三例（添加二例と極限添加一例とを併せる）、極限を表わすものが十八例、類推に用いられるものが二十七例（極限類推二十五例と限定類推二例とを併せる）、条件用法に立つものが五例（反復条件はなく、条件限定のみ）、不詳のものが二例、といったふうになる。
 (注⑦) タニを有する仮定条件句によって表わされる意味についても、このような呼び名を用いたことがある（文献¹⁰～¹⁸）。
 (注⑧) 否定述語とともに用いられていると見るサへは、本節で掲げたもののほかになお四例見えるが、それらは次節の類推表現で扱う（b・イの①⑦⑭、b・ロの⑥）。

(注⑨) 「浮中沈」のうち、「浮」は浮脈、「沈」は沈脈であろう。「浮脈」「沈脈」については、日葡『Fumiacu』(Chimiacu)の項に、それぞれ脈を取ればすぐ感じられる脈搏（邦訳・二七四頁）、《とぎれて弱い脈搏》（同・一二二頁）とある。なお両項とも『Fuchin』(浮沈)の項（邦訳・二六九頁）への引照指示が見えるが、説明にやや混乱があるようである（当該項目の注記参照）。「中」は、両者の中間態ということであろうか。また「表裏」は『日本国語大辞典』（第二版）に、漢方医学における病型把握法の一つであり、「表」は体表部、「裏」は体深部であるむね記述が見える。具体的なありようについて明らかにしうるのは差し当たりこの程度だが、要するに医者としての基礎的な素養を言った言葉と見ておいてよいからと思われる。

(注¹⁰) 拾遺集のこの歌については、文献²¹（七五頁）で扱っている。

(注¹¹) 「ただ」については、『かざし抄』（文献⁹、一四六～七頁）の、「なほ」と「ただ」との違いをめぐる次のような文言が参考となる。

『猶』は道理につきて言ふ「たゝ」は様子につきて言ふ。たとへば客の集まり居たるが、日の暮れなどに、かたへは帰る中に、やはり物語なとして居る人は「猶」なり。扱おのゝ婦（り）着きたるに、一人留まりたる客、又は主ばかりに成（り）たる様子は「只」也。「猶」は傍に同ぜぬ心あり「たゝ」は傍に物なき心あり。』

今風に言えば、状況変化の影響を受けることなく元のありようを維持するのが「なほ」であり、それ以外の要素のなんら付け加わらないありさまを表わすのが「ただ」だということになるであろうか。もとよりこの説は平安朝和歌を基礎資料とするが、この期の「ただ」についても十分あてはまり得るのではないからと思われる。

(注¹²) 文献⁷によると、前接語の価値を引き下げる「牀」の用法が確立するのは江戸時代からとされ（四頁、『醒睡笑』からは次の例が挙げられている（五頁））。

・（一四五）《でひたいにむかふばたかくそり、鼻はひらめにて、頬先とがらたる女房の、内そとありくあり。（中略）こはなにの因果に、あれていの者にはそふ事やとわらひたれば》（巻六・恋のみち・二）〔角・下、三三〕

次の例も類例とできよう。

・（五二）《当世はあれていの人にも礼をしたがよい（間違つて石塔に礼をした人の負け惜しみの言葉）》（巻一・賢たて・一〇）〔角・上・一一九〕
 なお『醒睡笑』では「風情」の語もそのように用いられる場合が見られ

るようである〔風情〕については文献③。

・(一〇七)《幽斎公御聞あり、其風情なる土民の上には何としていひけるぞ、やさしやと感じ給ひ、米を三石つかはされし》(巻五・姚心・二〇)(角・上、二三四)

このあとさらに、「三国(三石)」を織り込んだ歌が詠まれることになる(次の⑦の例参照)。

(注13) 分類名は「姚心」(きゃしゃごころ)であるが、そこに見えるのは、多くはその場に合わせて気の利いた歌を詠んだ話である。日葡《Qiax》の項には《ござっぱりして、つやかで、はなやぐこと》とあり、女性語《Qanojina》への引照指示も見える。また次項《Qiaxana》の《Qiaxana hio》の説明では《よく身を調べて飾り、ござっぱりして洗練された人》《また、才幹と技芸を身につけている人》とされる(邦訳・四九二頁)。「醒睡笑」には、この後者がよくあてはまるように思われる。なお文献③に詳細な論が見える。

(注14) 古典語ダニの類推表現においても、こうした溯行的な行文のものが見られた(文献⑪、二八〇〜八三頁)。

(注15) 古典語ダニの類推用法についても、このような小別を立てたことがある(文献⑫、二〇一頁。文献⑬、一〇〇頁)

(注16) 注⑥参照。

(注17) 注③参照。

(注18) 「語性」の語は文献④に依る。該論考におけるこの語は、不定語に属する諸語をひと括りにしての語類汎通特性がその内実をなす。本稿では、サヘという一の語の根本的な性質を指して呼ぶ言葉としてこの語を用いるが、多様な現象を相手取っての、統一了解要請に基づく意味連関把握の手だてという点で、本質的に異なるものではないと言つてよいかわかる。

(注19) 文献②(一七〜一八頁)に、そのような考え方が述べられている。文献⑬の「むすび」でも、この点に触れている。

(注20) 「語性」という用語については、注⑬参照。

(注21) 上代から中古へのノミの変遷を考えるに際しても、こうした二段に亘る枠組みを考えてみたことがある(文献⑦の「むすび」参照)。

(注22) この問題については、早く文献⑩があり、特に天草版平家を取り上げたものとして、文献⑤②がある。また文献①では、軍記物語での使用状況について報告が見える。

参考文献

- ① 阿食かをる(一九七五)「軍記物語の副助詞スラ・ダニ・サヘについて」『国語学論集』五号(安田女子大学)
- ② 江口正弘(一九九二)「天草版平家物語の「だに」「さへ」について」『熊本女子大学学術紀要』四四号(同氏(一九九四)「天草版平家物語の語彙と語法」(笠間書院)に第七章として収録。引照は後者による)
- ③ 小野正弘(一九九七)「風情」の語史」『国文鶴見』三二二号
- ④ 尾上圭介(一九八三)「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』(明治書院)「尾上圭介(二〇〇一)「文法と意味」(くろしお出版)所収。引照は後者による」
- ⑤ 鎌田広夫(一九八八)「天草本平家物語の「さへ」と「だに」」『国学院高等学校校紀要』二二二号
- ⑥ 菊地康人(一九九九)「サエとデサエ」『日本語科学』六号
- ⑦ 島田泰子(二〇〇一)「接尾語「てい」の用法とその意味構造」『香川大学教育学部研究報告』第一部・一一四号
- ⑧ 鈴木ひとみ(二〇〇五)「副助詞サエ(サヘ)の用法とその変遷」ダニとの関連において」『日本語学論集』一号(東京大学)
- ⑨ 竹岡正夫(一九七三)『かざし抄新注』(風間書房)
- ⑩ 田中敏生(二〇〇七)「蜻蛉日記」における副助詞ダニの諸用法とその連関——「相対的軽少性」の意義に基づき統一的理解の試み——『四国大学紀要』(人文)二八号
- ⑪ 田中敏生(二〇〇八)「枕草子」の副助詞ダニ—中古における「相対的軽少性」の意義の一確認——『四国大学紀要』(人文)三〇号
- ⑫ 田中敏生(二〇〇八)「大鏡」の副助詞ダニ—平安時代における「相対的軽少性」の意義の一確認——『言語文化』六号(四国大学)
- ⑬ 田中敏生(二〇一五)「今鏡」の副助詞ダニ—平安末期和文における「相対的軽少性」の意義の一確認——『四国大学紀要』(人文)四五号
- ⑭ 田中敏生(二〇一二)「古今和歌集」の副助詞ダニ—「相対的軽少性」の意義をめぐる——『四国大学紀要』(人文)三八号
- ⑮ 田中敏生(二〇一五)「後撰和歌集」の副助詞ダニ—平安朝和歌における「相対的軽少性」の意義の一確認——『言語文化』一三三号(四国大学)
- ⑯ 田中敏生(二〇一六)「拾遺和歌集」の副助詞ダニ—平安朝和歌における「相対的軽少性」の意義の一確認(其二)——『四国大学紀要』(人文)四六号
- ⑰ 田中敏生(二〇一六)「後拾遺和歌集」の副助詞ダニ—平安朝和歌における

- 〈相対的軽少性〉の意義の一確認（其三）——『四国大学紀要』（人文）四七号
- 18 田中敏生（二〇一四）『万葉集』の副助詞タニ―上代における〈相対的軽少性〉の意義の確認——『四国大学紀要』（人文）四二号
- 19 田中敏生（二〇一二）『古今和歌集』の副助詞「サへ」——基本義〈周縁波及性〉指定の試み——『言語文化』一〇号（四国大学）
- 20 田中敏生（二〇一三）『後撰和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認——『四国大学紀要』（人文）三九号
- 21 田中敏生（二〇一三）『拾遺和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認（其二）——『四国大学紀要』（人文）四〇号
- 22 田中敏生（二〇一六）『後拾遺和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認（其三）——『言語文化』一四号（四国大学）
- 23 田中敏生（二〇一四）『蜻蛉日記』の副助詞サへ―平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認——『四国大学紀要』（人文）四三号
- 24 田中敏生（二〇一四）『枕草子』の副助詞サへ―平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認（其二）——『言語文化』一二号（四国大学）
- 25 田中敏生（二〇一五）『大鏡』の副助詞サへ―平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認（其三）——『四国大学紀要』（人文）四四号
- 26 田中敏生（二〇一五）『今鏡』の副助詞サへ―平安朝末期和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認——『四国大学紀要』（人文）四五号
- 27 田中敏生（二〇一三）『万葉集』の副助詞ノミ―基本義〈収縮的単一性〉指定の試み——『四国大学紀要』四一号
- 28 田中敏生（二〇〇五）『醒睡笑』の副助詞バカリとノミ―限定表現における役割分担の衰退をめぐって——『言語文化』三号（四国大学）
- 29 田村清子（一九八四）『副助詞の変遷―その契機の解明を中心に―』『国語と教育』九号（長崎大学）
- 30 寺田ゆき（一九五九）『中世の副助詞―タニとサへの隆替―』『女子大國文』一三号（京都女子大学）
- 31 中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆみ抄新注』（風間書房）
- 32 沼田善子（一九八六）『とりたて詞』『いわゆる日本語助詞の研究』（凡人社）
- 33 松田直子（二〇一二）『醒睡笑』卷之五「姚心」——「きやしや」とは何か『歴史文化社会論講座紀要』九号（京都大学）
- 34 森重 敏（一九五四）『群数および程度量としての副助詞』『国語国文』二三卷二号
- 35 山田小枝（一九九七）『否定対極表現』（多賀出版）

（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）